

孤高のクルーザー2.91 R60、R75/5、R100S

巡航速度を極低回転で走行する。急かされない、アクセクしない、イライラしない、ぬるま湯でゆったり寛いでいるようなフィーリング、ライディングすること自体がリラクゼーション、言い換えれば走るマッサージ・チェア、高周波な振動などない、ゴツゴツするロードノイズもない、あくまでも波のない湖上をゆったり進む船のように優雅に流す。それがクルージングです。

ベストセラー本『ゾウの時間ネズミの時間』によれば哺乳類は心臓が一定数打つと一生を終えるような。成人安静時の心拍数は毎分60-70回、そのままオートバイの回転数にはリンクしそうにありませんがリラックスする、できないにはなにか関係はあるような気がします。高回転マルチをぶん回してアドレナリンが上がらない人はいません。クルージングなら気持ちもリラックス、高ぶった日常のストレスもリセットできるような気がします。

スペック競争も行くところまで行き、メーカーも別のアプローチを試みているのではないのでしょうか？ハーレーに対する遠慮も今ではもうなくなったのか各メーカーは大排気量クルーザーをリリースしています。トライアンフのサンダーバード(1,700cc)、ヤマハXV1900(1,900cc)ホンダVTX(1,800cc)、スズキ・ブルバード(1,800cc)、カワサキVN2000(2,000cc)、インディアン・チーフ(1,800cc)本家HDは1,900cc、エンジンだけなら2,150ccもリリースしている。このたびこのクラスに参入するBMW・R18も1,800ccである

アベレージ・スピードが上がった環境でクルージングを味わうには排気量アップが必要です。逆説的に一般道60キロならクルージング気分ですが倍の120キロでは回転が上がるため快適でも頑張っている感が出てきてクルージングとは言えなくなります。

1956年BMWはOHV600ccボクサーR60を発売、この時点でBMWのラインナップはR26、R50、R69、R67/3サイドカーとボクサー・ツインが3台あります。位置付けとしてR69はスポーツ、R67/3はサイドカー、R50はツーリング(?)R60の存在意義が無くなってしまいます。BMWの答えはクルーザーです。R50とR69には3.18(35:11)のファイナルを持っていますが、元々トルクフルなR60には2.91(35:11)のハイギアードを与えました。巡航速度を低回転でクルージングする設定です。

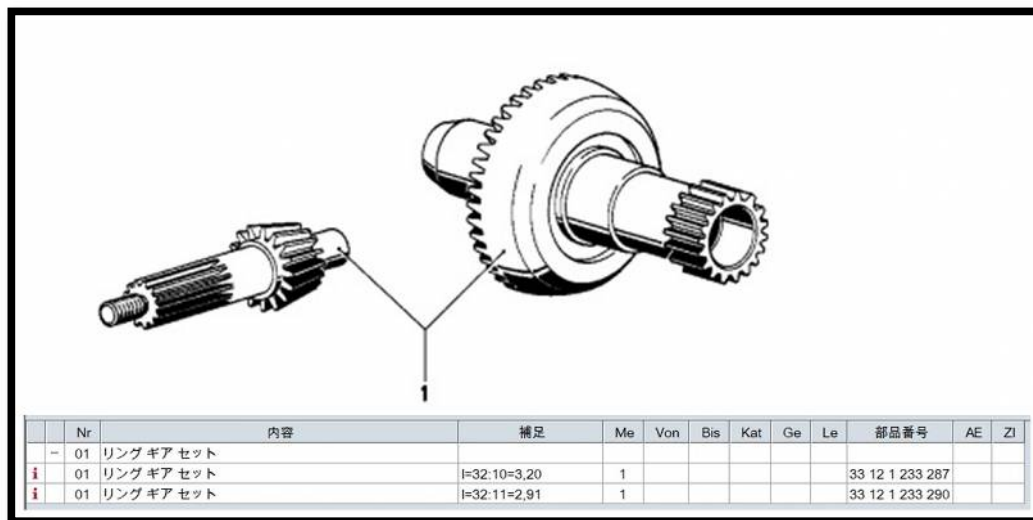
時代は飛んで13年後の1969年BMWオートバイの販売不振、存続危機の窮地から抜け出すため開発された新シリーズがスラッシュ・ファイブ。BMWの技術陣は主要マーケットであるアメリカのニーズに合わせR75/5に2.91のファイナル・ドライブを選び、1969年8月初号機がベルリン・シュパンダウ工場からラインオフされました。ロングツーリングを快適に！ハイギアード選択の理由です。

1973年、/5で成功を収めたBMWは忘れ物である5速ミッションとディスクブレーキを装備してスーパースポーツのR90Sをリリース、CB750やZ1-900などとうまく肩を並べます。この時期はジャパニーズに追い付け追い越せがテーマなのでクルージングの余裕はなかったようです。

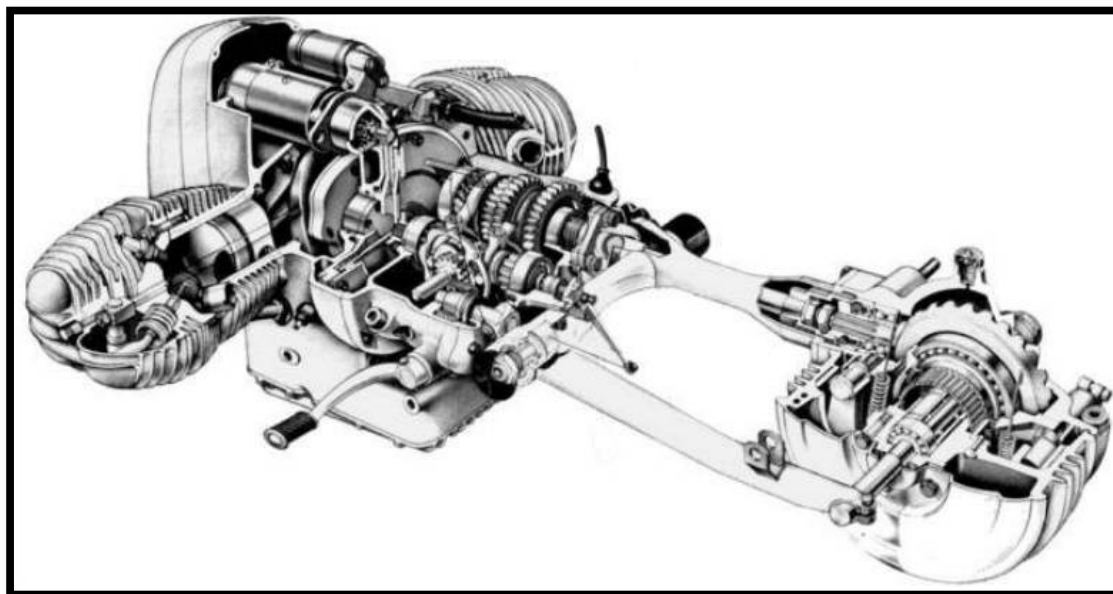
1976年、フルカウルの怪物ツーリングスポーツR100RSをリリース、90SもRSもスポーツなのでローギアードなのですが90Sの後継モデルとしてR100Sが同じ年にリリースされます。スーパースポーツの後継はRSなのでR100Sはキャラクターが被らないクルーザーとして味付けされます。RSの3.00のレシオからハイギアードの2.91の復活です。90Sと同じシルエットですが味付けが違います。カレーライスとハヤシライス、麦茶と麵つゆぐらい違います！？

CRIMECA

最高速、発進加速ゼロヨン、1/4マイル、レースでの成績。雑誌などメディアの扱いが販売成績に大きく影響します。いくらクルージングが最高と言ったところで数値に出ません。加速良くない、速度も出ないとなればよいバイクとは評価されません。BMW技術陣が考え抜いたギア設定は営業サイドの判断で数字が出るスペックに変更されてしまいました。R75/5も初号機から1年足らずで加速が良く、最高速が確実にマークできるローギアードの3.20に交換されてしまいました。R60も50、69と同じ設定に合わされました。



ピニオンとリングギアからなるファイナル・ドライブ・ギアセット 部品としてはどちらの仕様も選べたようです



発進時に後方が持ち上がる(テールリフト)ことからグミクー(GUMMIKUH:ゴムの牛)の異名を持つ 牛は後ろ脚から立ち上がるため 良いものを追い求める技術陣とマーケットのニーズを掘り起こす営業陣、求めるものはちょっと異なることもあるかもしれませんがそれぞれ味があって良いものです。あなたのバイクが初期型ならエンジニアが求めた味をちょっと多めに堪能できるかもしれません。

CRIMECA